

日常性に向け拡大された美的概念

—斎藤百合子『日常性の美学』を手がかりに

外山悠 (同志社大学)

米国のロードアイランド造形大学の教授である斎藤百合子は、数多くの日常生活における美学的な問題を論じている。斎藤美学の名を世に知らしめることとなったのは『日常性の美学』(*Everyday Aesthetics*, 2007)である。斎藤は、日常生活と芸術作品の領域との境界を曖昧にすることを目的とした環境芸術やレイショナル・アートにおける美的反応や判断には、自らの美学が対象とする日常性は含まれていないと考える。日常的な行為をその中に取り入れている茶道についても同様である。私たちはこれらの作品や行為を、その日常的なものとは区別される芸術的な性質を意識して受け入れるので、そこに日常性は存在していないと指摘しているのである。むしろ「重要でないようにみえるかもしくはほとんど無意識的なもの」が日常的な美的判断や反応であるとしている。このような反応や判断をも含む日常性を受け入れた美的概念はどのように拡大されるのかを明らかにしたい。

日常性の美学を扱った先行研究のほとんどはそれを同じく日常性を重視したデューイなどのプラグマティズムの哲学者たちと関連する文脈に位置づけるものである。オッシ・ナッカリネン(Ossi Naukkarinen)は、日常性は新たな事柄の探究や深い思索を伴わずほとんど意識されることがないものと考えられているが、その中の美的な問題は積極的に論じる価値のあるものであると考える。その根拠は、デューイらが社会的に広く共有されたものであり安心感を与えるという日常性の力に繰り返し言及していたということである。ナッカリネンはこの主張を取り入れ、日常的な美的反応や判断は社会的に共有された美意識を基礎とするゆえに安心感を与えると主張する。

しかし、斎藤が論じている日常性の美学の大きな特徴の一つは、美的判断と道徳的判断とが不可分な関係にあることである。斎藤は、包装された贈り物や清掃された部屋などごく日常的な対象を例に挙げ、私たちはそれらの外見的質に美しさを感じることで、確かに相手の道徳性の高さを判断していると主張する。さらに、「きれいな」政治などといった言葉遣いも日常的な美的判断と道徳的判断との結びつきを表すものであると主張する。美的判断と道徳的判断との繋がりは、1998年の論文「それ自体のことばによる自然の鑑賞」(“Appreciating Nature on Its Own Terms”)においてすでに主張されていた。その中で斎藤は適切な科学的知識をもって自然を美的に鑑賞するべきであるというアレン・カールソン(Allen Carson)の主張に従う。しかし、カールソンが自然に対して正しい判断をすることの重要性を主張するのに対して、斎藤は、そのような判断の道徳的な重要性を主張する。イーファー・トュアン(段 義孚)が、実在する他者の個性を認めることを道徳的な人間の定義としたように、適切な科学的知識によって自然自体の姿を理解することは道徳的な判断であるとしている。斎藤美学に見られるこのような美的な鑑賞や判断と道徳性との繋がりによってその美的概念を明らかにする。